

▽▽▽ 第5回みんなねっと茨城大会に参加して

みなみ会 加藤 貞子

つくばエクスプレス快速電車の車窓に広がる関東平野の向こうになだらかな稜線の名峰筑波山が見えてきました。秋葉原から45分で終点の「つくば」です。

そこは広々と整備された公園で、そこからまっすぐにのびた歩行者専用道路の街路樹も美しく紅葉し、横浜とは違う爽やかな空気を感じながら会場の国際会議場まで歩きました。さすが、つくば研究学園都市とも呼ばれ探査機「はやぶさ」で一躍有名になった宇宙航空研究開発機構（JAXA）など国の重要機関も近くに集まっており、国際会議場も近代的な明るい素晴らしい建物でした。

初日の講演会で、佐藤先生は、家族の支援という立場での講演でした。佐藤先生の資料によれば“希望すれば家族支援員が私たちの家族を個別に訪問し、一つ一つの悩みに丁寧に寄り添ってくれる。夢にまでみていた自分の老後を取り戻す。誰もが余裕を持って心ゆくまで大事な当人を支援することができる。目からうろこの家族支援の内容です。まず、当事者である私たち自身がこの中身をきちんと知ることこそが、日本にこれを実現させる早道です”。その中で例に挙げて説明していただいた、イギリスのバーミンガムで行なわれている精神保健医療システムの家族支援は理想的な家族支援でした。内容は次の通りです。

- ・看護師6人、ソーシャルワーカー2人、心理士1人、OT1人、サポートワーカー2人、医師1人、構成です。全てのスタッフがファミリーワークのトレーニングを受け、実施している。
- ・1家族に1人のケースマネージャーが担当、更に2人のファミリーワーカーがつく。家族一人一人のニーズアセスメントをする。

朗報として知りましたが、上記のイギリスをモデルにして、日本でも2014年より5年計画で「Family Work」のプロジェクトがスタートします。実施主体は「みんなねっと」で“家族の求める支援”の専門家を育成します。と発表がありました。

日本でも近い将来「家族支援システム」が実現して、私たち家族が元気になり、障害を持っていても病気が治らなくても当事者と共に地域で生活できる日がきっと来ると希望を新たにしました講演会でした。

∴ ∴ ∴ 第4分科会「ひきこもり問題への対応」について もみじ会 倉澤 政江

立場の違う3名の方より日頃の活動・仕事についての発表がありました。

○つくば精神保健福祉会(やすらぎ会) 塚本武志さんは家族会活動の他にボランティアで地域の見守り活動を続けている。その中で精神当事者の生活背景にある困難が見えてきた。家族がアルコール依存やギャンブルにより崩壊し、当事者自身も医療に結びつかず、社会的支援より遠ざかっているケースが多くあるということがわかってきたと話され、引きこもっている当事者だけでなく、家族も含めた広い支援が必要であること。行政・地域の力(民生委員や区長)を借りることも大切。と地道に地域の見守りを続ける塚本さんならではの話を聞くことが出来ました。

○築西保健所 野澤由美子さんは受診援助をした幾つかのケースを挙げ、「説得をつくす」時に大切にされる態度や配慮についてのお話でした。発病後20年経過の未受診の50代男性の例、2時間以上かけて説得、その後自ら車に乗り込む際、野澤さんに「どうもすみません」と言ったことが印象的だったとの事。本人が興奮状態や混迷状態であっても丁寧な対応が望まれる。本人のプライドを大切に、丁寧に話を聞こうというスタンスで睡眠、食事等日々の暮らしを聞いていく。趣味など関心を持つところから解きほぐすとのお話から自分らしく生きることを支えるという野澤さんの思いを感じました。

○NPO 法人れいめい(地域活動支援センター)理事長 森實和子さんは自らも当事者を抱える家族。ひきこもりだった24才の青年が「れいめい」に通所できるようになるまでを情感たっぷりに話されました。「この人だったら何とかしてくれるのではないか」そう思わせる雰囲気を持つ森實さん。「私はあなたを見捨てない、あきらめない」というつよい思いが話される言葉から感じられ、すごいなあと圧倒されました。

「ひきこもり」といっても様々な形態があり、大きな困難や絶望にある人ほど声を出さない、そんな中に分け入って丁寧に関係を結んでいく、3名の方のお話を聞きながら、近年アウトリーチが話題にのぼっていますが、結局は「人」なのかな…と思った分科会でした。